



研究所だより

利根川 徳

このたび協同総研の専務理事に任命されました利根川徳と申します。徳は「あつし」と読みますので、どうぞよろしくお願いします。未だに着任できていない状態で、この「研究所だより」を執筆するのもおこがましいのですが、自己紹介を兼ねて今考えていることを少し書きたいと思います。

私がワーカーズコープで働くようになって今年で丸10年になります。これまではセンター事業団の事務局員として協同労働の実践の現場で主に働いてきました。初めに配属されたのは若者就労支援や困窮者自立支援の現場でした。そのような事業に携わることで、この社会の格差・貧困問題の深刻さや矛盾を肌で感じることができました。ワーカーズコープに入団した時にはそれほど明確ではなかった協同労働運動への強い関心と期待は、こうした社会の実態に直に触れることで膨らんでいったのではないかと思います。その後、東京中央事業本部と北海道事業本部での事務局長を経て、この5年間は東京北部事業本部の本部長を経験してきました。

協同総研の専務理事として、どのようなビジョンを持って進めていけばよいのか、今はまだ白紙の状態です。果たして私に勤まる任務なのか、何を求められているのだろうかという自問自答する毎日ですが、あまり悩まず諸先輩方から真摯に学

びながら一步一步進めていきたいと思っています。

そもそも協同総研はどのような経緯で設立されたのか、どのような役割を期待されていたのか、先日発刊された「ワーカーズコープ三五年の軌跡」に協同総合研究所の歴史がコンパクトにまとめてありました。

設立総会で、黒川俊雄初代理事長は「多国籍企業による支配と生活破壊のなかで、働く者自らが協同組合企業をつくり、協同組合間協同を進めることによって、地球環境を守り、廃棄物の処理と再生をはかり、地域住民のきめ細やかな要求の充足を目指すことが重要になっている。それは、未知への挑戦であり、研究者と実践家が集まり、実践に本当に役立つような研究を進めていくことが求められている」と述べられています。

また設立趣意書では、「協同の現代的な問い直し」は協同組合運動も見据え、社会変革の立場を持ちながら、人間性回復のための経済・労働・文化のあり方、地域社会の再生など「協同」の視点から問うことを研究所の使命と位置付けています。

つまり、現代の危機的な状況に対して、「協同」の視点からどのような実践が有効なのか、既存の協同組合運動も視野に入れつつ、より新しい「協同」の姿を模索しながら、研究者と実践家が協力して

研究していくようなことが求められていたのだと思います。そして、そのことは今も変わらず私たちの課題なのだと思います。

また、この2017年の夏から秋にかけて、協同総研にとって、もう一つ重要なテーマが控えています。それは、私たちにとって悲願とも言うべき「協同労働の協同組合」法の制定の、大きなチャンスが訪れているということです。

この間法制化に向けて、協同総研では島村新理事長を先頭に理論的な構築を進めてきましたが、同時に各地で広がるワーカーズコープの実践の深まりが地域・自治体から注目され、ついには国会議員もつき動かし、法制化への道が一気に開けようとしています。

俄かに高まった機運の中、私たち協同総研の役割もまた重要さを増してくるであろうと思います。これから起こるであろうことを正確に予測する力は私にはありませんが、「協同労働の協同組合」が私たちだけの働き方ではなく、誰もが活用できるツールとして一般化する中で、団体立ち上げを支援するような機能が必要となるだろうし、私たちとは異なる理念や目的を持ったワーカーズコープが次々と立ち上がってくるようになれば、

協同総研としての研究対象は無限に広がっていくことにもなります。

しかし今はまだ法制化前夜、まずは法制化実現に向けて全力でサポートしていかなければならないと思っています。

26年前、協同総研の船出は、まさに“未知への挑戦”であったと言われています。私にとっても、協同総研での仕事は“未知への挑戦”であります。これまでアカデミックな世界とは無縁の人生を歩んできましたので、戸惑うことも多いと思いますが、10年間のセンター事業団での経験を生かして、協同労働の現場で日々起こっている実践と研究者を結び付けていくことに重点を置いていきたいと考えています。実際に、現場の組合員たちは「協同」を自らのものにしようと日々悪戦苦闘しています。とても優れた実践が行われているのに、そのことの意味が理解できず、ただ苦しい思いをしている仲間もいます。研究者の皆さんの力をお借りして、現場を勇気づけるような取り組みもしていきたいと思います。

不安もありますが、新しいステージに挑戦できることの喜びの方が勝っています。不慣れな仕事で、いろいろとご迷惑をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしく願いいたします。